

新技術・情報名	大豆「フクユタカ」の奨励品種採用		
実施場所	三重県農業技術センター	分類	①

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

適用地域では

- (1) 粗蛋白含量は、「タマホマレ」「玉光」よりかなり高い。
- (2) 成熟期は11月上旬で、「タマホマレ」より6日程度遅く、「玉光」より5日程度早い生態型IVcの秋大豆である。
- (3) 主茎長が長く、分枝数也多めで耐倒伏性はやや劣る。まん化しやすいが、耐湿性に強く生育は旺盛である。
- (4) 着莢数は少ないが、不稔莢が少なく稔実は良好である。百粒重は「タマホマレ」より大きい中粒種で、晩播、密播での小粒化は少ない。
- (5) 収量性は、「玉光」より高く、「タマホマレ」程度で、晩播適応性も高い。

2) 技術・情報の適応効果

現在、三重県の大豆奨励品種は「タマホマレ」「玉光」で、中・北勢地域を中心に2,430ha 作付けされている。その作付面積の90%が「タマホマレ」であることから作業期間が集中し、また実需者からはその加工適性について問題点が指摘されている。一方、「玉光」は晩生・小粒で収量・品質とも劣るため年々栽培面積が減少しつつある。そこで、粗蛋白含量が多く実需者の品質評価の高い「フクユタカ」を「玉光」にかえて採用することによって、水田転換畑での良質大豆の生産が期待できる。

3) 適用範囲

北・中南勢地域の平坦全域～中山間の畑および転換畑

4) 普及・利用上の留意点

- (1) 播種期は6月下旬から7月上旬で、栽植密度は10aあたり10,000本(75X25cm又は60x30cmの2本仕立て)～13,000本(75X20cm又は60x25cmの2本仕立て)を基準とする。
- (2) 生育旺盛で、ややまん化しやすいので、早播、密播は避け培土はていねいに行う
- (3) 紫斑病及びウイルス病媒介のアブラムシの防除の徹底をはかる。冷夏・寡照・多湿の時はさび病の防除を徹底する。
- (4) ダイズシストセンチュウ及び立枯性病害には、抵抗性を持たないので連作をさける。
- (5) その他、一般栽培に準ずる。

(作物部育種研究室 橋 尚明・服部 英樹)
(伊賀農業センター 児玉 幸弘・渡辺 公夫)

2. 具体的データ

表1. 生育・収量調査成績

試験場所	品種名	開花期	成熟期	主茎長	主茎節数	一次分枝	まん化多少	倒伏多少	稔実数	子実重	同左比率	百粒重	裂皮	糊粒	品質
		月日	月日	cm	節	本/個			個/m ²	kg/a	%	g	%	%	
本場	フクユタカ	8.20	11.5	79	16.1	4.3	0.6	3.1	760	29.4	107	29.7	0.9	0.8	2.8
	標)タマホマレ	8.12	10.30	60	13.3	4.0	0.2	2.4	842	27.6	100	26.7	0.8	0.7	2.6
	比)玉光	8.22	11.9	70	15.8	3.6	0.6	2.8	920	25.9	94	22.7	0.7	0.4	3.2
伊賀	フクユタカ	8.18	11.5	76	15.9	4.4	1.1	1.6	715	34.2	100	31.5	0.8	0.6	4.0
	標)タマホマレ	8.9	10.28	58	13.7	4.2	0	0.4	875	34.1	100	27.6	0.3	0.6	2.7
	比)玉光	8.20	11.9	71	16.4	3.5	1.0	1.6	945	32.3	95	22.8	0.5	0.1	4.3

注) 播種期: 本場7月4日、伊賀6月29日、成績は本場昭和54～63年平均、伊賀昭和55～62年平均

表2. 子実の分析成績 (環境調査S63年)

品種名	粗蛋白 %	粗脂肪 %	灰分 %
フクユタカ	43.8	18.2	5.1
標)タマホマレ	39.3	20.5	5.5
比)玉光	42.6	16.3	5.7

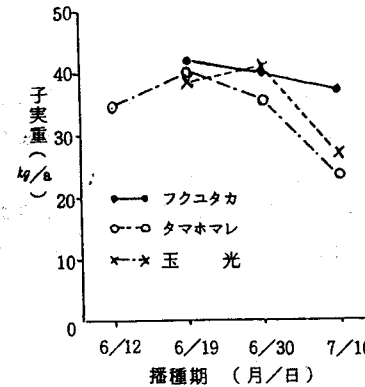


図1. 供試品種の播種期と子実重の関係 (本場・昭和62年)

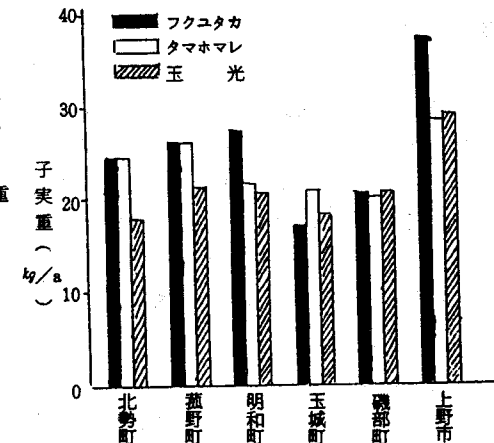


図2. 現地試験の子実重 (昭和57～63年平均)

3. その他特記事項

研究課題名 奨励品種決定調査
期間 昭和54～63年
予算区分 国補 (1/2)